「転生願望法」における大学生の対人関係特性 (1)

— 「生まれ変わりたい動物」上位3種の検討—

○西村知香¹・松原由枝²

(¹川村学園女子大学心理相談センター・²川村学園女子大学文学部)

キーワード: 転生願望法、大学生、対人関係

Characteristics of Interpersonal Relationships for University Students on “The Reincarnation Fantasy Technique” (1)

Chika NISHIMURA¹, Yue MATSUBARA²

(¹ Psychological Counseling Center, Kawamura Gakuen Woman's Univ., ² Faculty of Liberal Arts, Kawamura Gakuen Woman's Univ.)

Key Words: The Reincarnation Fantasy Technique, university students, interpersonal relationships

目 的

輪廻転生とは、人が死後、人間に生まれ変わるか別の生物に生まれ変わるかは不明であるが、何かしらの生命に生まれ変わるということを意味する仏教用語である。“生まれ変わったら何に生まれ変わりたいか”という転生願望が心理臨床場面に用いられたのは、スペインの精神科医 Pigem (1949) の「願望表現検査」に端を発している(ただし津田・長屋・富田(1999)による)。我が国では、津田・西尾・長屋(1982)が児童を対象として心理臨床場面で用いていることを報告しており、その中で本手法が有効な心理アセスメントになり得ることを指摘している。

生まれ変わったら何に生まれ変わりたいか、という質問に関して、それを動物に限定し心理面接場面に用いたのは、佐竹隆三が最初であるとされている(山中, 1978)。生まれ変わりたい動物だけでなく、生まれ変わりたい動物も尋ねることによって、被検者の無意識レベルの理想自我と影(shadow)を知ることができるという。この回答結果から、被検者が対人関係の中でどのような葛藤・問題を持ち、どのようにそれらを解決したいのかを間接的に理解することができる。この佐竹の方法を用いて、松原(1997)は女子短大生を対象に調査研究をおこない、回答された動物の生活域ごとに女子短大生の人との関わり方の特徴について考察している。

本研究では、女子大学生を対象に質問紙による「転生願望法」を実施し、大学生の対人関係における特徴を明らかにすることを目的とする。

方 法

研究対象: 女子大学生1~4年生310名のうち、記入漏れや記入ミス等のあった回答を除外した302名を分析の対象とした(年齢: 18~22歳, 平均年齢: 19.32±0.97歳, 有効回答率97.42%)。

調査時期: 2012年11月下旬~12月上旬。

方法: 以下の内容を記した調査用紙を配布し、即日回収した。

質問項目: (1)生まれ変わったらどんな動物に生まれ変わりたいか、(2)その動物の具体的なイメージ、(3)生まれ変わりたい具体的な理由、(4)生まれ変わりたい動物、(5)その動物の具体的なイメージ、(6)生まれ変わりたい具体的な理由、(7)対象の属性(学科・学年・年齢)なお、本研究では生まれ変わりたい動物の回答数上位3種の動物に関して(1)~(3)の結果をもとに分析した。

結 果

生まれ変わりたい動物の回答結果のうち、回答数の多かった上位3つの動物は以下の通りであった。ネコ(回答数:121, 40.06%)、イヌ(回答数:58, 19.20%)、トリ(回答数:33, 10.93%)の順番で回答数が多かった。

ネコと回答した群の質問項目(3)「生まれ変わりたい具体的な理由」の結果をみると、自由気ままに生きることができる・マイペースに生きられる・かわいがられ愛されるから、とい

う理由が多かった。イヌと回答した群では、飼い主にかわいがられるから・家族の一員として飼われるからなど、人に飼われる前提でイヌを選んだという理由が多かった。トリと回答した群の結果には、空を飛びたいから・自由だから・束縛されたくないからなど、自由を求め人間の生活圏から離れた暮らしを望んでいるという理由が多かった。

考 察

ネコと回答した群は、自分の思い通りに生きたいと望んでいることがいえる。また、他者とは緩い繋がりを求め縛られたくないという、ある種の自己中心性がうかがえる。その一方で、周囲に受け入れてもらいたいと希望しており、他者とのアンビバレントな関係性が推測される。また、一定の距離感を保った対人関係を望む傾向が考えられる。

イヌはネコと比べて人間に身近な動物であることから、イヌと回答した群は他者との緊密な繋がりを求めていることが考えられ、他者依存の傾向があるといえる。また、この群は周囲の近い人物と安定した関わりを求めているといえよう。そういった点では、誠実な対人関係を築きやすいのではないかと考えられる。

トリと回答した群は、より自由を求め環境や他者に拘束されることを忌避していることが考えられる。裏を返すと、現在の環境に対して閉塞感を感じており、その環境からの離反を求めていると言することができる。

Fig.1 トリ・ネコ・イヌと回答した群の特徴

引用文献

- 松原由枝(1997). 女子短大生の人のかかわり方 - 「転生願望法」アンケートの結果をもとにした考察から - 女子教育, 57-61
- 津田浩一・長屋正男・富田忠明(1999). 幼児・児童における転生願望法の研究(1) - 一般的な傾向と発達の変化について - 大阪市立大学看護短期大学部紀要, 1, 61-68
- 津田浩一・西尾博・長屋正男(1982). 被虐待児の心理特性 - 投影法による検討 - 小児の精神と神経, 22
- 山中康裕(1978). 思春期内閉症 Juvenile Seclusion - 治療実践よりみた内閉神経症(いわゆる学校恐怖症)の精神病理 - 中井久夫・山中康裕(編) 思春期の精神病理と治療 岩崎学術出版社, 17-62